増田信行様を偲ぶ
追悼文集

長機会

増田 信行 様

追 悼 文 集

増田信行様が 2025 年 6 月 3 日、91 歳でお亡くなりになりました。この追悼文集は、長機会ホームページに 2025 年 8 月～2026 年 1 月号に寄稿された追悼文を纏めたものです。

2026 年 2 月 1 日

長機会

増田信行様の経歴

1934 年　静岡県に生まれる
1957 年　九州大学工学部卒業、同年三菱造船株式会社入社
　　（後の三菱重工業）
1967 年　三菱重工業　長崎造船所　第一工作部第一機械課一工作係長
1974 年　三菱重工業　長崎造船所　第一工作部第一機械課長
1981 年　三菱重工業　長崎造船所　第一工作部次長
　　（1982 年 10 月～1983 年 4 月　生産技術課長兼務）
1984 年　三菱重工業　長崎造船所　第一工作部部長
1987 年　三菱重工業　長崎造船所機械管理部長
1987 年　三菱重工業　広島製作所副所長。
1989 年　三菱重工業　下関造船所長。
1991 年　三菱重工業　取締役下関造船所長。
1992 年　三菱重工業　常務取締役機械事業本部長。
1994 年　三菱重工業　取締役副社長機械事業本部長。
1995 年　三菱重工業　取締役社長。
1999 年　三菱重工業　取締役会長、日本原子力発電取締役。
2000 年　日本防衛装備工業会会長。
2001 年　経済産業省産業構造審議会
　　航空機宇宙産業分科会航空機委員会委員長。
2002 年　成蹊学園理事。
2003 年　三菱重工業　相談役。
2008 年　三菱武道会会長。
2019 年　三菱重工業　名誉顧問。
2025 年　６月３日、急性心筋梗塞のため自宅でご逝去。91 歳没。

目次

「増田元相談役の思い出」・・・・・・・・・・・・・・ 冨永 明　P-05

「上司としてお仕えして」・・・・・・・・・・・・・・ 勝代治伸　P-18

「勇気を与えてくれた増田機械管理部長短命人事」　牧浦秀治　P-21

「増田元相談役の思い出」・・・・・・・・・・・・・・ 光畑英哉　P-23

「(財) エンジニアリング振興協会　増田会長」・・　大森安芳　P-25

「偉大なる先輩から学んだこと」・・・・・・・・・・ 岩崎啓一郎 P-27

「増田さんと花田さんの思い出」・・・・・・・・・・ 藤川卓爾　P-30

「増田さんの背中」・・・・・・・・・・・・・・・・ 松浦一郎　P-32

長機会ホームページ　2025 年 7 月号掲載

「増田元相談役の思い出」　　冨永明

ほんの少し前まではお元気にされていて電話でお話をしたばかりなのに、突然の訃報に接し只々驚くばかりです。増田元相談役との思い出を二、三ご紹介し、在りし日のお姿をお偲びしたいと思います。

エピソードその 1.　海外調達

増田さんは長船時代ずっと一工作部所属（広製に転勤される直前の数ヶ月のみ機械管理部長）でした。一方、私は内作の主力製品（タービン、ボイラ等）にはあまり関係のない計装電気やプラント設計の所属でしたから、仕事の上での直接のつながりはありませんでした。ところが 火力プラントの価格競争が激化し、輸出競争力をつけるためには海外調達が必須の時代となりました。自社で造っているものも海外調達せざるを得ないというケースもありました。プラント設計はその調達の責任課で、ポンプ、ファン、弁、配管、純水装置、エアコン、取水装置等々を扱っていました。海外調達しても安かろう、悪かろうでは話にならないので品質を確保するためには製造のノウハウを持った人材を相手の工場に派遣し指導・監督する必要があります。

このため工作部の力を貸して欲しいと当時部長の増田さんのところに頼みに行きました。工作部にとっては自分の工場のことで忙しいのに外国の会社に有能な人材を送り込むことになり悩まれた事と思います。しかし増田さんは「適任者は〇〇課長か？　□□係長か？あるいは現場の △△君か？」と快く承諾し、最適の人材を派遣して頂きました。非常に有り難く、海外調達の大きな推進力になったことを覚えています。これは単なるエンジニアリング専門の会社では持ち得ない底力だと確信したことを思い出します。

エピソードその 2.　イランプロジェクトの最終引渡し(FAC)交渉

中東イスラム世界のプロジェクトはどの国も他の国とは違う難しさがありましたが特にイランのラジャイは契約形態からして通常のフルターンキーや FOB と違って責任範囲が複雑で、“ボイラだけを除くエンジニアリング込みホールプラント”とよばれていました。きちんと完成したつもりでもなかなか FAC(最終引き渡し証書)をくれません。プラントとして若干のペンディングもありましたが、主原因はイラン－イラク戦争およびそれに起因するイランの資金不足といえるものでした。

増田さんは三菱重工の会長時代、2001 年 7 月に経済ミッションの代表として小泉首相の親書を携えてイランのハタミ大統領に会われることになりました。当時原動機事業本部長だった私はその話を耳にし、千載一遇のチャンスとして私も同席させて欲しいとお願いし了解して頂きました。ハタミ大統領と会長の面談では、増田会長の当意即妙のご対応もあり、非常に友好的に話が進みました。そのあとすぐマラキ TAVANIR（電力庁）総裁のところに出向き、今度は MHI の会長として三菱が如何に信頼性の高いプラントを完成させイランに貢献したかを説明し早期解決の必要性を訴えて頂きました。

この結果、イランのマラキ総裁と三菱代表（若園副本部長を任命）とのトップレベルで問題解決に当たることが決まりました。その後集中的な打ち合わせを行い、契約後 17 年、運開後 8 年を要しましたがやっと双方が納得する形 win-win）で決着しました。同時に、

う一つのプラントであるガーブも決着しました。解決の道筋作りを率先して実行して頂いた増田会長に感謝した出来事でした 。

「日本との関係重視を報道するIRAN DAILY」

ハタミ大統領と握手を交わす増田会長

大統領「日本との協力重視」との報道

エピソードその 3.　仕事を離れて

増田さんが一工作部に配属されたときの工場長が末永聡一郎さん（後の三菱重工社長）で、一緒に相当飲み回られたそうです。ここらの経緯は長機会ホームページ（下記）に詳しく書かれています。またご自身のご自宅には現場の強者（つわもの）が頻繁に押しかけ、大酒を酌み交わしたという逸話もお聞きしました。

長船ニュース「航跡」末永前社長をお偲びして（添付-1）

パサージュ琴海にて　2014年（平成26）撮影

一方、若い頃、木こりの経験をして鍛えたと言っておられましたが腕っ節が人一倍強く、お好きなゴルフでもクラブをぶんぶん振り回しておられました。

長崎のパサージュ琴海は海越えのホールが 3 つもあり、攻略が難しいユニークなコースです。そこの 1 番ホール（約 400 ヤード）は途中で左にコースを変えその後またまっすぐという癖のあるホールですが増田さんは 2 打目にグリーンにオンした後、勢い余ってオーバーする打球でみんなをびっくりさせたというエピソードが残っています。

数年前まで私たちと一緒に湘南カントリークラブで楽しそうにプレーされました 。

最後に長機会ホームページについての思い出を述べます。増田さんには上記末永さんの記事を含め 4 回投稿して頂きました。下記の増田さんの投稿をご覧ください。

① 「台湾の老朋友」（ラオポンユウ）（添付-2）
② 「東京の田舎もん　ⅠⅡ」　（添付-3）
③ 「その後の田舎もん－余談」　（添付-4）

②、③ではご自身の俳句・川柳を披露されています。

増田さんが新しいスマホを使われるようになったとき、「冨永君、長船ニュースが見えるようにセットしてくれ」と言われました 。勿論、長船ニュースとは長機会のホームページのことです。パソコンで長機会ホームページをご覧になっておられたことと、嘗ての長船ニュースを懐かしんでおられることが分かりました。これには頼まれた私が嬉しくなったことを覚えています。」

心からご冥福をお祈りします。

以上

添付- 1

長船ニュース「航跡」　　増田信行様　　**New!**

重工本社は来年、丸の内に移転する。
部屋はかなり狭くなるので、膨大な資料や書類、書籍などを早々と整理している。
過去に苦労した仕事、懐かしいデータや出張報告などを見ていると当時を思い出して捨てがたい気持ちになり、忽ち時間は過ぎてゆく。
しかし、自分には貴重な資料でも他人には紙屑に過ぎず、いずれ廃棄される運命にある。
その中に昭和60年9月2日の長船ニュースを見つけ、その一面の“航跡”の欄に私が上梓した「末永前社長をお偲びして」が載っていた。
8月14日に長船で35年に亘ってご活躍された末永聡一郎取締役相談役（前社長）がお亡くなりになられた。
9月1日の午後に所長から「長船ニュースの航跡欄に末永社長のことを書いてくれ」と電話があった。
この欄には既に「犬の心」と題してゲラ刷りも済ませていた私は、さっそく総務部広報の担当者に原稿の締切日を聞いたところ今日中にと言う。考える余裕もなく、「分った。今日中とは今日の午後12時迄だ。君は明日9時出勤の筈なのでそれ迄に届ければ良いな！！」と言ってＯＫを取った。
ゲラ刷りまで済ませていた私の原稿「犬の心」は33年の間、日の目を見ないまま今日まで来た。ここで長機会ホームページに載り、皆さんの目にとまったら幸いです。

昭和60(1985)年9月2日発行　長船ニュースより

末永前社長をお偲びして

末永前社長の突然の訃報に接し、驚きと共に残念でならない。

末永前社長は造機工作部時代を、昭和23年7月から10年間組立工場長（現・組立課長）33年2月から2年間第一機械工場長、35年から1年間次長兼工務課長として、36年3月まで在籍された。

私は32年に入社、第一機械工場に配属となり、見習中の時末永工場長が上司となられて技師に登用して頂いた。まだ右も左も分らない新入社員の私は、工場長に仕事の面は勿論、会社外でもずいぶんお世話になりご指導頂いた。若々しく、気取らず、何事にも悠揚迫らぬ工場長を皆「末永さん」と親しくお呼びしていた。以来20数年、楽しく懐かしい思い出ばかりが残る。

当時の工場は、建家も機械設備も古く、冬になるとカンテキの煙で工場の中が見通せない程だった。ようやく輸銀の資金で外国製の機械が次々と入って来ていた。私も米国シンシナチ社の六軸傲フライス盤を担当し、末永工場長と一緒に写った完成記念写真が残っている。又、外国から来た機械売込みのエンジニアと工場長が英語で折衝して私達に通訳されるのを見て、ドイツ語はお得意だと聞いていたが英語も上手だと皆感心した事があった。

一番の思い出は何と言っても一緒に飲んで廻った事。当時の定時は午後4時。サイレンと共に席を立つのは仕事の少ない（？）工場長と新入社員の私。2人とも作業服のまま、社倉の前にある「君松」をスタートに、「桃若」「偕楽」「ばってん」…と飲み歩く。酔って出てくる工場長の十八番は「博多どんたく」や「ガマの油」。ある時は大浦の社宅までお送りし、こちらもへばって泊りこんだ事もあった。翌朝、私は食事がのどを通らないのにお替りをされて元気そのもの。出勤の社船の中で「君、今何を勉強している」と問かれ、どぎまぎしたものだった。

最後にお会いしたのは、昨年末の事業所視察。途中わざわざ組立課の詰所に立寄られ、課長の椅子に坐って、「俺はずいぶん永くこの椅子に坐っていたなあー」と本当に懐かしそうにしておられた。この言葉の中に全ての思いが含まれているような気がしてならない。

思い出はつきないが、ただただご冥福をお祈りするばかりです。

第一工作部長　増田　信行

記事に掲載したシンシナティ社フライス盤完成記念写真

後列機械正面が末永工場長、一人置いて右が筆者

犬の心

我が家の庭の主人公は、飼犬ポメラニアンである。小さい時から屋外で飼っている。芝生の上を毎日元気よく走り廻っている。

１０年前、私も待望のマイホームを建てた。資金難のため、庭は石ころのままにしていたが、１年ほどたって、やっとの思いで植木数本と芝を植え、何とか庭の格好をつけた。毎日丹精込めて育てたおかげで、夏になると青々とした立派な芝生が出来上がった。

ところがである。毎夜、野良猫が来て遊んでゆくようになった。自分達のために作ってくれたと勘違いしたらしい。遊ぶだけなら良いが、ウンチをしてゆく。後片付けも大変だしせっかくの芝が黄色く枯れる。考えた末に犬を飼う事にした。猫は怖れて来なくなるだろうし、子供達の情操教育にも役立つ。一石二鳥だとさっそく家族揃って買いに出かけた。

気に入った犬はなかなか見つからない。たまたま犬屋さんとネコ中に、生まれたばかりのポメラニアンが数匹、廊下の向うから出て来た。手のひらに乗る程の大きさで、何とも可愛らしい。子供達はすっかり気に入ってしまった。しかしポメラニアンは室内犬である。室内で飼っては猫は追い払えない。

「本来、犬は自然に育てるのが一番良い。ポメラニアンは室内犬だが、上手に飼えば屋外でも育つ。」という犬屋さんの言葉に買ってしまった。さあ大変！

上手に飼えばと言っても初めての素人ばかりである。中学生の息子を責任者に任命し、本を買って来たり日誌をつけたり、皆で必死に世話をした。

それから８年、人間で言えば既に中高年になるらしいが、病気一つせず立派に育った。

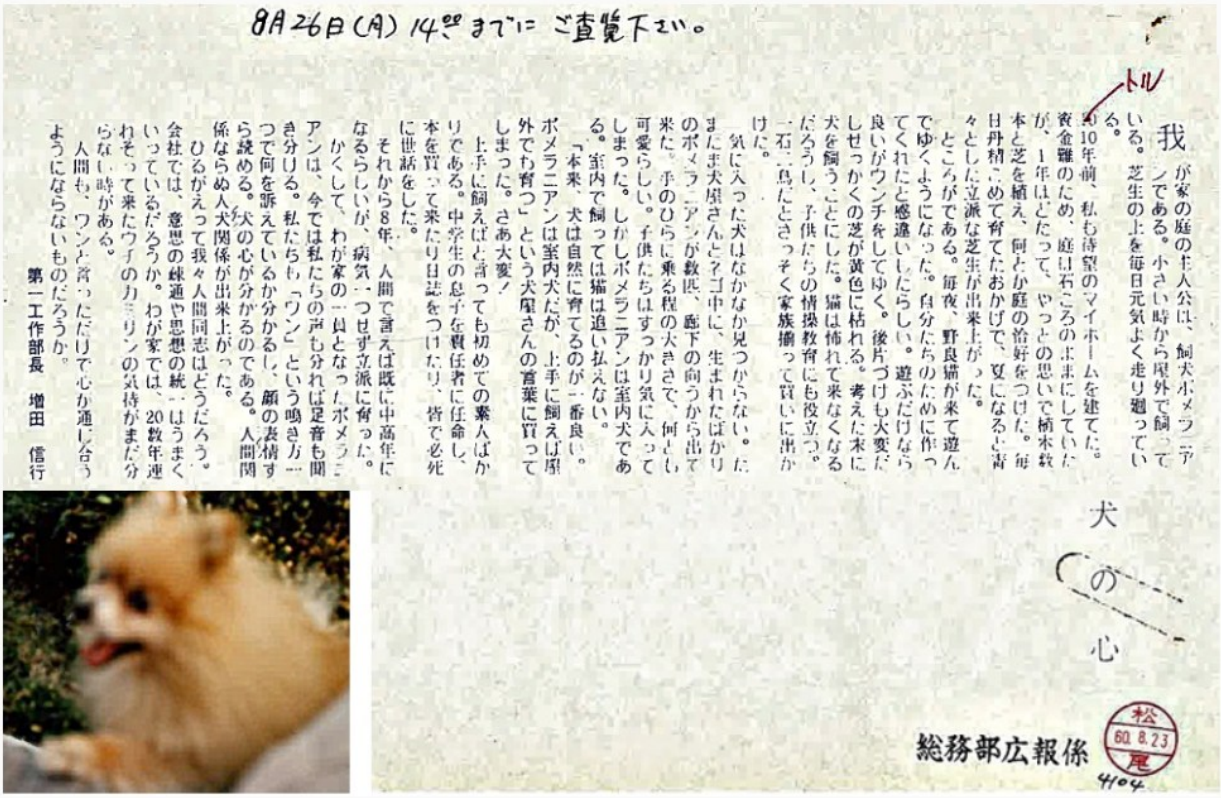
かくして、我が家の一員となったポメラニアンは、今では私達の声も分れば足音も聞き分ける。私達も「ワン」という鳴き方一つで何を訴えているか分るし、顔の表情すら読める。犬の心が分るのである。人間(ニンゲン)関係ならぬ人犬(ニンケン)関係が出来上がった。

ひるがえって我々人間同志はどうだろう。会社では、意思の疎通や思想の統一はうまくいっているだろうか。我が家では、二十数年連れそって来たウチのカミサンの気持ちがまだ分らない時がある。

人間もワンと言っただけで心が通じ合うようにならないものだろうか。

第一工作部長　増田 信行

当時、没となった原稿のゲラ刷り。


8月26日(月) 14ᵐᵒ までに ご査覧下さい。

トル

我が家の庭の主人公は、飼犬ポメラニアンである。小さい時から屋外で飼っている。芝生の上を毎日元気よく走り廻っている。

10年前、私も待望のマイホームを建てた。資金難のため、庭は石ころのままにしていたが、1年ほどたって、やっとの思いで植木数本と芝を植え、何とか庭の格好をつけた。毎日丹精込めて育てたおかげで、夏になると青々とした立派な芝生が出来上がった。

ところがである。毎夜、野良猫が来て遊んでゆくようになった。自分たちのために作ってくれたと感違いしたらしい。遊ぶだけなら良いがウンチをしてゆく。後片づけも大変だしせっかくの芝が黄色に枯れる。考えた末に犬を飼うことにした。猫は怖れて来なくなるだろうし、子供たちの情操教育にも役立つ。一石二鳥だとさっそく家族揃って買いに出かけた。

気に入った犬はなかなか見つからない。たまたま犬屋さんとネコ中に、生まれたばかりのポメラニアンが数匹、廊下の向うから出て来た。手のひらに乗る程の大きさで、何とも可愛らしい。子供たちはすっかり気に入ってしまった。しかしポメラニアンは室内犬である。室内で飼っては猫は追い払えない。

「本来、犬は自然に育てるのが一番良い。ポメラニアンは室内犬だが、上手に飼えば屋外でも育つ」という犬屋さんの言葉に買ってしまった。さあ大変！

上手に飼えばと言っても初めての素人ばかりである。中学生の息子を責任者に任命し、本を買って来たり日誌をつけたり、皆で必死に世話をした。

それから8年、人間で言えば既に中高年になるらしいが、病気一つせず立派に育った。

かくして、わが家の一員となったポメラニアンは、今では私たちの声も分れば足音も聞き分ける。私たちも「ワン」という鳴き方一つで何を訴えているか分かるし、顔の表情すら読める。犬の心が分かるのである。人間関係ならぬ人犬関係が出来上がった。

ひるがえって我々人間同志はどうだろう。会社では、意思の疎通や思想の統一はうまくいっているだろうか。わが家では、20数年連れそって来たウチのカミサンの気持ちがまだ分らない時がある。

人間も、ワンと言っただけで心が通じ合うようにならないものだろうか。

第一工作部長　増田　信行

犬の心

総務部広報係

松 60.8.23 尾

4104

愛犬ポメラニアン

添付―2

○増田 信行 様　New!

台湾に関するエピソードで約20年前に書かれたものです。台湾に行かれた方は親日的な雰囲気に思い当たる方も多いと思いますが、この話は暖かい現地の人との熱い触れ合いの想い出です。台湾には長船は台湾電力大林、林口、大譚GTCCのHRSG（排熱ボイラ）他多数のプラントを納入し、現在も林口に80万kW X 3の火力発電所を鋭意建設中です。尚、三菱重工としては台湾新幹線他、他事業所の納入実績も沢山あります。（事務局）

台湾の老朋友（ラオポンユウ）　　増田 信行

「しばらく来てないね。今度いつ来る、あした来る？」これは１年も台湾に行かないとかかってくる電話の老朋友の口癖である。

台湾の街を歩くのは面白い。雑然とした中でも活気がある。看板が林立していてその漢字を読むのは楽しい。牙科醫院（＝歯科医院）など何回見ても頬がゆるむ。夜の街では屋台のような店先で生きた蛇や蛙なども売っており、頼めば料理してくれる。ただし食べたことはない。

私が初めて台湾に行ったのは十数年前のことであり､台南で３人の男と知り合った。林さん２人と阮さん(今は故人)である。林さんの２人からは大理石で作った三結義(桃園の誓い)の像を頂いた。

老朋友になったいきさつはこうである。当時の台湾ではブランデーで乾杯する。自分１人で杯を空けることはない。飲みたくなれば誰かと目を合はせ、合意の上で２人でまたは皆で乾杯する。しかも相手を酔いつぶさないと気が済まない。

初めて会った日の会食で、私は用心することにしていたが、私が酒に強いという情報を得ていた彼らは助っ人に数人の林さんを同席させていた。私が糖尿の気がありドクターストップを受けていると言うと、暫くして見たことのない妙な料理が出てくる。　「これは何だ」と聞くと「糖尿に効く漢方料理だ」では乾杯となる。血圧も高いのだと言うとまた変な料理が出てくる。「これは血圧に良いのだナ」と聞くとそうだと言ってまた乾杯になる。私も腹をくくり、午前０時を過ぎると私から乾杯を仕掛けた。そのうち相手は１人減り、２人減りして２人になってしまった。それ以来、老朋友としての付合いが始まったのである。

台湾に行けば必ず台南にも足を運び酒肴を共にする。台南の海鮮料理は美味しい。ある時は美人座餐廳の開店祝にも連れて行かれた。ここではカラオケも歌う。彼らのカラオケはナツメロ半分、そして軍歌が半分である。勿論日本の歌だ。自分達は本省人で台南には鄭成功の子孫が多いので半分日本人だ、女房は女学校卒だと自慢する。　３年前、鳥山頭ダムに行った。八田與一という日本人が作ったのだという。台南のすぐ近くだと言ったが、車で１時間程走ったところであった。

鳥山頭水庫の門を通りしばらくすると小高い丘の上の森の中に墓園があり、八田與一の銅像はすぐに目に入った。與一は作業ズボンに作業靴を履いて腰をおろして座っていた。長崎の製造現場で３０年も作業服、作業ズボン、作業靴で仕事をしていた私には親しみのある姿であった。

右手を頭にかざし､遠くを見つめる姿は、苦労して作つた珊瑚潭を感慨深げに眺めているように思えた。　そのすぐ後方に墓があり、與一とその妻外代樹の名が並んで刻まれていた。墓に用意していた花を供え、與一の像と記念写真を撮った。近くには工事で活躍した日本製の１０トン機関車も置いてある。

ダムに上ると珊瑚潭は満々と水をたたえて、名の通り珊瑚の形をして美しかった。夫と共に台湾の土になることを心に決めていた夫人が身を投げたという放水口からは勢いよく水が放出されており、その上にある展示室には鳥山頭の水利に関する説明資料があり、與一が金沢出身であることを知った。

私は日本統治時代の日本人の銅像や墓があるのに驚きを憶えると同時に感激もした、彼らがすぐ近くだと言って私を連れてきた理由も分った。彼らは自慢げであった。

翌日は台南にある奇美美術館に行った。休館日にも拘らず石榮堯氏に日本語での案内を頂いた。一級の美術品、楽器や名画などが数多く並んでいたが、驚いたことは５階に歴史上の人物であるシーザー、クレオパトラと台湾で著名な李登輝前総統、鄭南榕氏と並んで日本人の後藤新平、八田與一の胸像が陳列されていたことであった。

昨年、金沢に行った際、街中で出会い会話を交した十数人に尋ねた。「金沢出身で台湾で活躍した八田與一という人を知っていますか。」「ハイ知っています。学校で習いました。」と答えたのは若い女性ただ１人であった。多分金沢の人であろう。

老朋友は、今では私に酒は余り飲むな、無理するなと言い、随意と言って杯をあげる。車の乗り降りや悪路では必ず手を貸してくれる。私が仕事で台湾に行くと、何も言わないのに露払いをしてくれる。

台湾における対日感情の良さは台湾に行く度に深く感じ、心が安まる。昔、反日家が一番多いのは日本だと耳にしたことがあるが、親日家が一番多いのは台湾であろうとつくづく思うのである。

台北市
桃園市
新竹市
宜蘭縣
苗栗縣
台中市
彰化縣
太魯閣
國家公園
花蓮縣
臺灣
雲林縣
嘉義市
玉山國家公園
烏山頭水庫
台南市
台南市
台東縣
高雄市
高雄市
屏東縣

添付―3

パートⅠ　東京の田舎もん　（20年前に執筆）

光陰矢の如く歳月は流れ，卒業以来，長崎在住３０年余と人生の大半を過ごしその後，広島２年余，下関２年余，そして東京２年余とはや３７年余が過ぎた。

私の趣味の一つはドライブである。昭和３６年に運転免許をとり３３年間無事故・無違反を誇っている。
　長崎時代は家族連れでドライブ。　しかし長崎は日本の西の端（車を走らせて行ける所として），どこへ行くにも朝日を目にして東へ走り，夕日を目に受けて西へ帰る。行く所もだんだん少なくなり，いつの間にか正月は太宰府へ初詣，盆に郷里の墓参りが，習慣になった。
　７年前，住み慣れた長崎をあとにして広島へ，続いて下関に移った。子供達は家を離れ家内と二人の生活となり　ドライブの範囲も大巾に広がった。助手席に家内を乗せ，気ままなドライブを楽しんだ。東は尾道，鞆の浦，北の大山，松江に鳥取の砂丘，南に四国一周と瀬戸大橋。初めての土地は面白い。事前に地図を広げて計画をたてる。これも楽しみの一つ。目的地に通過ポイントと距離，時刻。ノートに計画対比で実績も記入する。
実に念が入り且つ正確だ。とは言っても道を間違えることはある。地図を見直し，夫婦ケンカをしながらのドライブも振り返ると楽しい。
迷句も沢山出来た。２～３紹介する。

・叱られて　地図を見直し　Uターン
・ナビゲータ　老眼鏡の　目もかすみ
・ボケてないゾと　大歩危小歩危　見て走る

注：大歩危小歩危（おおぼけこぼけ）　徳島県西部、吉野川が四国山地を横断する渓谷、深淵と絶壁・奇岩の景勝地

３５年間、西の田舎に住んでいた私にも思いもかけぬ東京暮しが始まった。これまで，「東京は人が住む所ではない，人ばかり多く空気も濁ったゴミゴミした所で生活の場ではない」と日ごろ言っていた私も覚悟を決めた。麻布が生まれ故郷の家内は生き生きしている。　品川に住む家内の従妹からは「ポーと東京に出て来て大役を仰せつかって大変ネエー」と同情された。車も持ってくるべきか迷った。都内は道が狭く曲がりくねっている。一方通行も多い。右へ曲がり右へ曲がり右へ曲っても元の道に戻らない。遠出は駄目だ。渋滞で時間の計算がたたない。運転はいやだとやらない東京人も多い。
　しかし，慣れると満更でもない。結構緑も多い。　武蔵野の森林や，人だかりの銀座にもよく出掛ける。　車もデイアマンテに買い替えた。
　助手席の家内からは，もう６０年も東京に住んでいる人みたいだと言われるこの頃である。

パートII　その後の田舎もん　（今年、その後のことを加筆したもの）

　今年、平成29年は、昭和で言うと92年になる。私は昭和32年に長船入社、62年に長崎を離れたので、入社以来前半の30年を長崎、後半の30年を広島、下関、そして東京に住んだことになる。
　25年も東京に住んでいると長崎の田舎もんもすっかり都会人らしくなり、「ポーと田舎らから出て来て大変ネェ－」とは言われなくなった。
　趣味のドライブは相変わらずで、行動範囲は更に広くなった。北海道など遠方のドライブはレンタカーを利用することにした。
　80才を過ぎると歳のせいか疲れやすくなり、最近は首都圏、即ち、神奈川、千葉、埼玉、静岡県など近場のドライブが多くなった。沼津生まれの私は静岡県特に熱海や箱根、伊豆半島一周などが多くなった。
　ナビゲーションシステムは当社の第1号を装着し「神船ニュース」にも掲載された。ドライブも大変便利になり、地図は殆ど見ず、計画実績も記録しなくなった。しかし歳をとると記憶力もだんだん薄くなり、この稿も写真集を引っ張り出したりしてその時の景色を思い浮かべながら書き上げている。
　毎度いろいろな面白い経験やハプニングがあり、話の種は尽きないが、ここでは北海道ドライブの最初の2つだけを紹介することにしたい。
（「ドライブコース」を参照されたい）

①ノサップ岬と北方領土
北海道ドライブを計画していた平成3年、4月16日ソ連大統領ゴルバチョフが来日し、北方領土返還の話が出た。返還される前の外国である北方領土を見ようと計画にノサップ岬を入れた。

注：1991年（平成3年）はソヴィエト連邦消滅の年
　　3月　ゴルバチョフ　初代ソ連大統領に就任　　4月16日　ゴルバチョフ　来日　　6月　エリツィン　ロシア大統領に当選
　　8月　ゴルバチョフ　書記長辞任　　11月　エリツィン　共産党解散の大統領令　　12月25日　ゴルバチョフ　ソ連大統領辞任

下関造船所は長距離フェリーを造っており、当時、東日本フェリー㈱は最高の顧客であった。東日本フェリーの社長から自分が造った船で行かず、航空機で行くとは何ごとかと言われ、青森から函館まで下船製フェリー「びるご」で行くこととした。船室で家内から「下船（しもせん）」と書いてあると言われてみると「下船の際はお忘れ物ないようご注意下さい。」とあって「しもせん」ではなく「げせん」であることが分った。
出港してしばらくすると私達は別の船室に案内された。そこは東日本フェリー㈱の社長が乗る最上級の船室であった。
結局、函館に一泊を余儀なくされ、翌日登別温泉からドライブがスタートしたが、札幌までの2日間は当初の計画にはないものであった。

北海道の田園風景は素晴らしい。はるか彼方まで広がる丘陵、時々顔を出すお花畑や白樺林。北の大地とはこのような景色かと見とれる。丘陵地帯は大きな海原みたいなもので、うねりの高い所では遠方まで見渡せるが、低い所では丘の上までしか見えず、よそ見などしていると突然目の前に車がせまってくる。あとで北大出身の上林常夫さんから聞いたところによると、北海道は交通事故死亡率が一番多いとのことでなるほどとうなづけた。
当時は高速道路はなく（長崎県もない）、PAもないため昼食は途中で見つけた食堂に入った。まだ暑くて蠅が多かった。勿論クーラーも普及しておらず、牧場もあるので、蠅も多かった。

根室の空は晴れていた。遅く着いたホテルの夕食には「花咲蟹」のさしみがついていた。食べかたの講習もあって、足の太い方をハサミで切り、節は折り目をつけて細い方を引っぱると骨？筋？が出て来る。身を少し出して醤油をつけ、口を上に向けて開け流しこむ。実においしいものだ。
日本一早い日の出（5時03分；91年9月21日）を見ようと勇んで床に着いたが、飲み過ぎのせいか翌日目を覚ますと太陽がまぶしく輝いていた。いそいで朝食をとり、朝日に向かって車を走らせた。
今回の旅の目的は北方領土を見ることである。ノサップ岬から双眼鏡でのぞくとかすかではあるが歯舞島が見え、満足して帰途についた。
ドライブ記録では総行程800kmのドライブで費用は17万円であった。若かったせいか今思うと強行軍に思えるが、全く疲れなかったと記憶している。

②旭川兵村記念館と模型飛行機「隼」の初飛行

加藤隼（ハヤブサ）戦闘隊と言えば私より年配の人で知らない人はいないと思う。隊長は“軍神”加藤建夫少将であり、隼戦闘隊長として特に有名であった。彼は北海道旭川市東旭川の出身で、郷土にある「旭川兵村記念館」で没後60年記念の「加藤隼戦闘隊長特別展」が平成14年4月29日から10月20日で開催されていた。
工藤五一さんは同じ東旭川出身で、昭和40年から名古屋機器製作所のディーゼル機関設計課に勤務しており、同郷のよしみで戦前戦中の航空機に凝っていて、「ゼロ戦」「隼」「神風」の模型飛行機（ラジコン）を兵村記念館に寄贈した。彼からこれらの初飛行をするのでぜひ来て欲しいと頼まれ、行くことにした。
せっかく旭川に行くのであればすぐ東にある網走にも足を伸ばし、刑務所とオホーツク海も見ることにして計画した。
私は旭川は初めてであるが、生まれる前に家族は旭川に住んでいたことがあり、長姉は「啓明小学校」を卒業している。小学校はまだあると聞いたので、兵村に行く前に訪問した。立派な小学校であった。
「兵村記念館」では芦原巌夫理事長から丁寧な御案内を頂き、東旭川兵村は戦前戦中の日本の航空界を代表する4名の巨星の出身地であることも分った。

当日は曇り空ではあったが模型機のフライトには差支えない。大勢集まった地域の人、関係者と模型飛行機に囲まれて挨拶を頼まれた。旭川は初めての私は話の種は持っておらず、三菱重工の紹介と兵村記念館、模型機のフライトの話だけでは3分もかからない。啓明小学校を見て来たと話をすると「オー」とどよめきの声が上がった。歴史のある有名な小学校なのだろうと感じた。話だけではつまらないので、歌を歌うことにした。「私は旭川は初めてであるが、隼戦闘隊の歌を60年前に歌ったことがあるので歌います。」

エンジンの音ごうごうとハヤブサは行く雲の上、翼にかがやく日の丸と　胸に画きし荒鷲がしるしぞわれらが戦等隊

歌いはじめると皆合唱して歌い出した。しかし私が2番　を歌うとだんだんと声が少なく小さくなった。そこで　ついでにラバウル航空隊の歌まで歌った。

銀翼つらねて南の前線　ゆるがぬ守りの海鷲たちが・・・

60年振りに歌ったのであるが、声を出すと次々と歌詞が頭に浮かび歌い終えることが出来た。皆感激して拍手喝采であった。
芦原兵村記念館理事長と工藤五一さんへの礼状には次の句を書き添えた。

兵村の空に舞いたる隼に歓声あがるよろこびもまた

先に80才を過ぎると歳のせいか疲れやすくなると書いたが、目の疲れから腰や背中が痛くなる。2時間の運転でひと休みすることにしているが、この頃は1時間で休憩をとる。街なかの人が多い通りでは良く周囲を注意して見る。
最近、「高齢者の運転は事故が多く危険である。免許証は返上してやめるよう」言う声が多くなった。高齢者の事故は大々的にニュースで取上げ、肩身の狭い思いがする。しかし56年も無事故無違反の私にとっては高齢者を十把ひとからげで言って欲しくない。イスラム教はテロリストだという声もあるがイスラム教徒にとっては甚だ迷惑なことだろう。

しかしながら、ヒヤリとしたり、ハッと思うことはだんだん増えてきたと感じる。「ハインリッヒの法則、300／29／1」というものがある。
ヒヤリハットが300件あれば、小事故29件、大事故1件発生するという。
車がないと不便この上ないが、いずれ事故を起こす前に免許証を返上して運転をやめる時が来るであろう。

最後に迷句もたくさん作ったので少し紹介する。

- **よそ見して叱られ走る北海道**
- **団体を押しのけ絶景うつし撮る→** 摩周湖にて増田夫人を写す
- **渋滞で協議の結果引き返す**
- **晴れた空 朝日に向かってノサップへ**

＜ドライブコース：北海道＞

① 登別温泉－オロフレ峠－有珠山昭和新山－洞爺湖－支笏湖－札幌－(千歳空港－女満別空港)－美幌峠－川湯温泉－摩周湖－阿寒湖－弟子屈町－釧路湿原－釧路－根室－ノサップ岬－霧多布岬－厚岸－釧路空港　(H3.9.15～9.21)
② 女満別－網走－小清水湿生花園－北見－層雲峡－富良野－美瑛－旭岳－旭川(旭川兵村記念館)　(H14.7.18～7.21)
③ 千歳－定山渓－倶知安－ニセコ－岩内－小樽－札幌　(H23.8.4～8.8)
④ ウィンザー洞爺湖－室蘭－岩内－泊原子力発電所－積丹半島一周－小樽－札幌　(H24.8.19～22)

＜ドライブコース：東北＞

① 郡山－猪苗代湖－旧滝沢本陣－飯盛山－芦ノ牧温泉－会津若松(鶴ヶ城、勝常寺)－五色沼－白布峠－白布温泉－米沢(上杉神社)－上山温泉－山寺(立石寺)－山形(霞城公園)－仙台　(H5.4.29～5.2)
② 青森(ねぶたの里)－八甲田山－睡蓮沼－蔦温泉－銚子大滝－奥入瀬渓流－十和田湖(乙女の像)－発荷峠－湯瀬ホテル－八幡平－小岩井農場－仙台　(H6.7.22～24)
③ 奥沢－軽井沢－鬼怒川温泉－日光－益子－奥沢　(H7.4.30～5.2)
④ 下丸子－御殿場－山中湖－蓼科高原荘－日本ビラタス横岳－蓼科湖－白樺湖－女神湖－軽井沢－万座温泉－白根山－志賀高原－嬬恋高原－軽井沢－下丸子　(H7.8.13～16)
⑤ 下丸子－大洗(原子燃料再処理研究所)－水戸(瑞龍山、西山荘)－偕楽園－旧水海道小学校－笠間－下丸子　(H8.2.24～25)
⑥ 下丸子－真岡－那須荘－軽井沢－熊谷－小金井－下丸子　(H14.4.30～5.4)
⑦ 下丸子－足利(足利学校、善徳寺)－那須荘－茶臼山－ 中禅寺湖(金谷ホテル)－湯元温泉－霧降高原－日光 －大谷(大谷石)－下丸子　(H16.10.12～15)
⑧ 下丸子－山名町(グリーンピア)－伊香保－榛名湖－軽井沢－下丸子　(H18.10.13～16)
⑨ 下丸子－宇都宮－壬生(独協医大)－宇都宮－中禅寺金谷ホテル－戦場ヶ原 －日光－下丸子　(H26.7.22～24)

添付―4

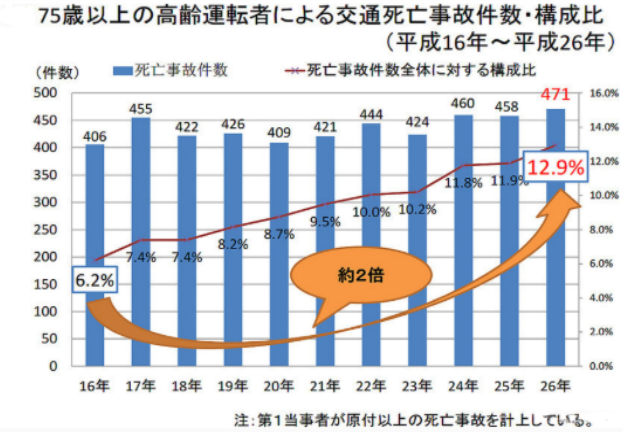
○増田 信行 様　　New!

その後の田舎もん－余談

昨年8月に投稿した「その後の田舎もん」について、数人の人から声が寄せられた。それは最後に余談として書いた「高齢者の運転」についてであり、殆どの方は高齢者で、周囲から運転についていろいろ言はれて迷惑しているとのことであった。
余計なことを書いたものだと後悔してはいるが、再度私なりの考え方を述べたい。

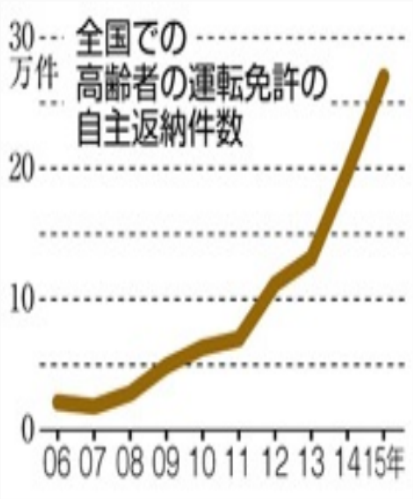
高齢者が交通事故を起こすとマスコミはテレビも新聞もこれでもかこれでもかとばかりに細かいところまで取り上げて騒ぐ。高齢者をひとまとめにして単一的に報道する。これに影響されて社会一般は高齢運転者全員を不安に落としめるように声を上げる。

事務局注：右の２つの図は典型的な新聞記事の例を事務局が勝手に添付したものであり執筆者の意に沿ったものではありません。



日本は高齢化社会であり、これからますます高齢化してゆく。人は高齢化するのは避けられないが、老化現象を極小化することは出来る。
「老化とは生活機能が劣化する」ということであり、「老化現象とは個人差が広がってゆくプロセス」である。この老化、生活機能の劣化は「前向きな人、ポジティブな人ほど少なく、消極的、後ろ向きな人ほど大きい」と言われる。

参考までに言い換えれば、長寿の秘訣は（事故、病気、遺伝性を除く）
① 人づき合いが良い、コミュニケーションが良い
② 物事にこだわらない
③ 人生に目標、希望を持つ
と言はれている。
これは活力と同じであり、活力があるほど若さ（若いではない）を保つ、即ち長生きする。
トルストイの“アンナカレーニナ”の中に、「若さという幸福はみな似ている。しかし、老人にはそれぞれの幸福と悲しみがある。」という言葉があります。これは、若い時はいくらあの人は幸福だ、不幸だ、うらやましいなどと言ってもその差は僅かであり、歳を重ねる中でその差が広がってゆくことを表しているものです。しかし、高齢者が今から態度を改めても先は短かくその効果は少ない。若い時からの態度の積み重ねで活力の差が出てくるものです。
その差を無視して十把ひとからげに論じてはならない。高齢化社会に対応して今、世界的に自動運転その他AIを駆使したりなどして様々な開発が進みつつあります。私の知人の某社社長Hさんが年始に見えられて、このたび車を買い替えると言われた。彼は87才であり、自動ブレーキがかかる車が出たので乗りかえるとの事。



私は57年間無事故で運転していますが、「これからも絶対に事故は起こさない」とは言はない。
「歳も考えて事故を起こさないようにより慎重に安全運転する！！！」

原稿がちょっと短かいかなと思っていたところ。冨永代表から「ドライブに因んだ俳句か川柳があれば追加するよう」要請がありましたので、次のような迷句を追加します。

(北海道)
・いつ来ても 歓迎している　蕗の列
・摩周湖で　霧の晴れ間に　ポーズとる
・阿寒湖は　雨と寒さで　もうアカン
・霧多布　景色に見とれ　きりがない
・降りないと　言っても景色にゃ　勝てやせぬ

(奥州)
・ウグイスの　出迎え受けし　八甲田
・避暑に来て　暑さに参る　蔦温泉
・慣れてないと　肩に手を置く　ゲタの妻
・ヒェーと言う　白布峠の　雪の道
・鄙の宿　昔なつかし　囲炉裏端

(東北)
・イロハ坂　過ぎてまだ有る　字余り坂
・“ご安全に”　挨拶かわす　お地蔵さん
・風流と　言えぬ雨中の　紅葉狩り
・岩陰に　ひっそり咲きし　大文字草
・葉桜に　なっても客あり　滝桜
・ワンコソバ　食べて満足　３０杯
・義妹(いもうと)の　家が待ってる　小腹空き

(中国・四国)
・金比羅宮参り(みやまいり)　おかげで今年は　杖軽く
・砥部焼の　藍の色見る　目に力
・摘み足りぬ　ワラビを思い　帰路につく

目次に戻る

「上司としてお仕えして」　　勝代治伸

第一機械課の課長をされていた昭和 53 年(1978 年)に、増田さんがリーダになられて、各課の課長・係長・スタッフ 9 名で「機械工場は今後どうあるべきか」を検討するチームを立上げられ、私もメンバーとして参加しました。

国内外の文献を集め、工作機械に人工知能(今で いう AI)や自動工具交換・自動ワーク交換などの無人化機能を付加して無人運転化すること、それらの機械を使って“無人工場”を目指すべきことを「機械工場の将来像と今後の取組み」として纏め、この考えは、工場だけでなく製品全体に及ぶとしました。その後、「工場の将来像と今後の取組み」は、鋳物や組立も巻き込んで、10 年ごとに全部で 3 回纏められ、第一工作部の指針となりました。

昭和 56 年（1981 年）に、高製と長船合同チームでアメリカの W 社に技術交流を目的に出向くことになり、全体のリーダを高製の丹羽副所長、長船のリーダを増田部長がやられ、私もメンバーとして参加しました。

Westinghouse社にて

長船からは、蒸気タービン車室加工用の大型　プラノマチックやシュラウド加工ライン、ブレード加工 FMS などを発表しましたが、増田部長には「工場の運営と小集団活動」と言うリクエストがあり、特に小集団活動を“サンドイッチ作戦”と言う言葉を使って説明され好評でした。

※サンドイッチ作戦　・上(管理・監督者)と下(作業者)とで職場に絶えず刺激を与えていく。下からの盛り上がりは、上の管理・監督者からの刺激が絶えず無ければ出てこない。

昭和 60 年(1985 年)になって、増田部長と生産技術課の保田課長で各課に分散されている技術スタッフを生産技術課に集約する話が検討されていました。私も意見を求められたので、「その組織は、いずれ現場から遊離するので、やるべきでない」と意見具申しました。10 月 に生産技術開発グループが出来、反対していた私がグループ主任に任命されてしまいました。個性の強い 10 名近いメンバーを纏めるのは大変でしたが、増田部長や花田次長、保田課長の後ろ盾もあり、大型ターニングセンターのパレットチェンジやロータのハイスピードバランス装置などに取組みました。特にハイスピードバランス装置は、相川所長から「輸出競争力の観点から投資額は半分」との指示を受け、その上で、100 万キロワットのロータをやれる様にすることになり、担当の田中スタッフへのプレッシャーは大変なものでした。それまでの長船の能力はヒータボックスの制約もあり 60 万キロワットまでとされていました 。

ロータ加工用に初めて汎用旋盤でなく NC 旋盤を導入することになりました。その際、NC プログラムのミス、NC の誤動作でロータを削り込んだらどうするか対策を検討し、機械メーカの唐津鉄工と共同で“ワークへの工具刃先の食い込み防止装置”と言うかソフトを開発して、特許出願することになりました。そして、元々のアイディアを出された増田さん、実際に装置を作り上げた牧瀬さんと私、唐津鉄工で特許を出願しました。その後、唐津鉄工か ら他社に売れたと言うことで実施料が入りましたので、10 数年間、会社から支給された特許実施料の 3 分の 1 をお送りし続けました。

増田さんが下船所長時代も、本社で原動機の会議があった後、原動機業務部のメンバーが新橋の小さなスナックで打ち上げをやっている中に、どこから聞かれたのか分かりませんが、突然、スナックに来られ、私たちとお酒を呑まれ、談笑されたことがありました。

平成 9 年（1997 年）だった思いますが、私が支援に出向いていたブラジル CBC に会社を視察されると共に、白石社長や駐在されている方々を激励するために冨永副所長と一緒に来られたことがありました。

ブラジルCBC工場にて（1997年2月13日撮影）

時間が無いので小型チャーター機でサンパウロから工場のあるバルジニアに移動されたのですが、雨模様であったこともあり、空からの眺めを楽しむと言う余裕もなく、ひたすら飛行機が落ちない様に祈っていたとの記憶があります。

当時、バルジニア工場は閉鎖されるのではないかと噂されていたこともあり、田舎町には珍しく空港にはテレビなど報道の方が詰め かけてきていたのですが、笑みを浮かべながら、三菱重工業の社長らしく、言葉を選びながらゆっくり回答されていたのが印象に残っています。

左の写真はその場面です。

課長時代から、「こうあるべきだ、こうありたい」と言うことを短くまとめて私達にお話して頂きました。

副社長・社長になられても同じで、新聞などにインタビュー記事が 掲載されていたものをメモしておりましたので、増田さんの教えと言うことで最後に紹介させて頂きます。

＜昭和 54 年　第一機械課　増田課長＞

ものの見方と考え方、発想の転換とは

・まず、大所・高所から眺めよ
・目的が何か忘れるな、原点に帰れ。
・緩急順序をみやまるな。今、何が大切か、何をなすべきか。
　自分に問い直し、問い直し、仕事を追え。
・物が、事象が、現場が真理を語る。頼れるのは自己の五感である。
・活字、過去にとらわれるな。既成観念でものを見るな。自分なりの見方をせよ

発想は学歴ではない。思うか思わぬかである。

・考えだけでは役に立たぬ。すぐ試みよ。
・地に足を付けよ。階段は、一段ずつ着実に上れ。
・道は必ずある。あきらめるな。
・先制と集中。悔いなき人生を。

＜平成 7 年 4 月　朝日新聞　増田副社長＞

・転がる石に苔は生えない
・誠意、熱意、決意を持て
・マクロに見てミクロに実施
・難しいから言うのだ。難しくなかったら言わない。

＜平成 11 年 4 月　入社式　増田社長＞

活力ある人材であれ。活力とは

・自らの意志と責任感で発揮する力
・創造的かつ進歩的な行動力
・苦しさに耐える力

これまで、本当に有難うございました。　安らかにお眠りください。

以上

目次に戻る

「勇気を与えた増田機械管理部長短命人事」　　牧浦秀治

長船建設課に入社（昭和 55 年）の私は、第一工作部に居た増田信行さんとはお話する機会はなく、直接お話ししたのは北海道電力の苫東厚真 PFBC 現地が初めてでした。

平成 7（1995）年 11 月に G/T コンプレッサー羽根損傷事故を、翌年 8 年 6 月にボイラ風室噴破事故が起こり、引渡しが一年先となりました 。8 月上旬には増田社長が北海道電力本店に出向き北電社長に謝り、更に休みを利用して 8 月 31 日（日）には中神常務と一緒に激励のため北海道苫東厚真の現地事務所にお越し頂きました。現地で指導員と懇談し、「誠意」「熱意」という言葉を色紙に書いて頂きました。

2001年7月22日　増田会長　ガズラン現地訪問

次にお会いしたのは 2001 年 7 月 22 日のガズラン現地です。イランでハタミ大統領他の要人と面談された後、サウジに立ち寄られました。赤字を出しているガズランプロジェクトの現地を視察して、指導員全員に激 励の言葉を頂きました。その後、関係者だけ部屋に入って懇談し、いろいろアドバイスを頂きました。

大森ガズラン現地所長に贈呈目録を渡す増田会長

赤字の話ばかりになってお叱りを受けると覚悟をしていましたが、 突然私を見て「牧浦君、逆立ちしてみろ！君のポケットからチャリンチャリンと隠している利益が出てきそうな気がする」と言われました。この一言で暗い雰囲気が一気に明るくなりました。

その後は、関東でお会いする機会が何度もあり、都度、記念艦「三笠」の保存会会員になれと誘われました。

当時、増田さんは記念艦「三 笠」の保存会の会長をされており、第一声は ｜牧浦君、横須賀の三笠に行ったか。三笠は、日本人で良かった、日本人は、なんて素晴らしいんだ。俺たちもやれる！という気持ちを持たせてくれるぞ!!」でした。

増田さんが『歴史街道』(2015 年 6 月号）三笠特集に「日本人の矜持と誇りを思い起こすために・・・　記念艦「三笠」への歩み」という題で寄稿されています。増田さんは締めくくりに次のように書いています。

「私は、日露戦争とはさまざまな技術やシステム、また大局を見据えた外交などの戦術を練り上げて、国を挙げた大戦略を構築して戦った戦争であったと考えます。明治の先達たちは、これを見事に遂行し、勝利を得ました。これこそ日本人の誇りであり、世界史における金字 塔である。・・現在、記念艦「三笠」を訪れる人が増えているのは、現在の日本を覆っている閉塞感や、自国に誇りを持てなくなっている現状を打開するヒントを、三笠に求めているのではないでしょうか」。

最後にお会いしたのは、昨年 5 月 22 日の「相川賢太郎様の追悼文集」完成打ち上げ会でした。「足がちょっと不自由になった。若いころは、杖をついた先輩をみると生きるって大変だなぁと思っていたが、今、自分がその年になった」と笑っておられました。

相川さん、高橋伯さん（私の入社以来の上司）そして増田さん、長船が世界で輝いていた時代を語ってくれる人が相次いで 亡くなってしまいました。

増田さん本人が御存知無いうちに私に勇気を与えてくれたことがあります。
私は、機械管理部長になって一年も経たない在任 243 日で解任され他事業所に転勤になりました。一年も任せられない管理者なんて“要らない人” だったのだろうと落ち込みました。でも私より任期が短い人がいました。増田さんでした。機械管理部長になって 182 日で広製へ。そのことを知り、私の頭の中に巣くっていた「要らない人」という言葉が消えました。

増田信行さん、2025 年 6 月 3 日死去、91 歳。

先輩や友人たちと、増田さんの元気な姿を思い浮かべながら語り合う。思い出を語り合う時、その人が身近になり、懐かしくなる。「増田さんを語り合う」、これが私の増田さんへの供養の仕方です。

以上

目次に戻る

長機会ホームページ　2025 年 8 月号掲載

「増田元相談役の思い出」　　光畑　英哉

増田元相談役に初めてお会いしたのは、私が長崎から東京の原技センターに来てから、ずっと後のことです。増田さんは私が長船にいた時代、一機に在籍され、建設部の私はお会いする機会はありませんでした。

私は湘南 CC のメンバーでずっとゴルフをやっていましたが、増田さんを中心とする仲間の会「信九会」（ゴルフ＋懇親会：長船　OB＋九大卒）が発足した際に『熊本も九州だ』と優しい言葉で仲間に入れて頂きました。それから湘南で楽しい時間を過ごすことができました。有難く思っています。

増田さんを囲む信九会の懇親会（写真右下が私）

増田さんが三島に別荘を作られた折、設計を手伝わせて頂きました。第一の希望は『風呂場から富士山が見える様にする』事でした。完成して最初は設計通り美しい富士山がお風呂から見られました。その内、近所に別の建物が出来、すっかり見えなくなり大変残念がっておられました。

また庭造りが大変楽しみな様でした。しかし腰が痛いので中腰での作業はできません。庭や畑の場所に穴を掘られ、中腰にならないように、その中にご自分が入り畑仕事をしておられました。

また、日本酒がお好きで珍しいお酒を一緒に探すのも私の楽しみでした。ゴルフは腰を使うので痛めては悪いと横振りで力強い球を打っておられました。何でも佐賀の米所の出身で鍛えられていて重いものは得意だと話しておられたものです。腕は丈夫ながらペースメーカを入れておられ無理はできない様でした。

91 歳で亡くなられました。私にとっては若くしてお亡くなりになったと大変残念に思います。もっとお話しが聞きたかったものです。私の家には増田さんが剣道で使う折の手ぬぐいが置いてあります。今や形見になりました。大切に飾っておきます。

どうか安らかにお眠りください。

以上

目次に戻る

「(財)エンジニアリング振興協会　増田会長」　　大森　安芳

私と増田元相談役との繋がりは、先月号に牧浦秀治様が記載された 2001 年 7 月のガズラン現地御視察時に加え、2003 年 7 月 10 日に㈶エンジニアリング振興協会による第 23 回

増田協会会長から表彰状を授与される私（大森）

増田協会会長と一緒に写真撮影

エンジニアリング功労者表彰（国際貢献）で当時のエン振協の増田会長から表彰された事でしょう。

冨永本部長、若園副本部長に囲まれて

この表彰に至るには冨永原動機事業本部長（当時）から増田会長（当時）への強い推薦、牧浦長船火プ建部長（当時）がサウジ滞在中の私に代わり、東京のエン振協での面接（表彰の可否に強く影響する）に出席いただく等、お二人の御尽力によるところ大で、これが表彰に繋がったと感謝しています。

又、私は表彰式出席のためサウジから一時帰国しましたが、式には夫婦での出席が求められ、家内も晴れ舞台に緊張気味でした。表彰式及びその後の懇親会には冨永本部長、若園副本部長も出席され、増田元相談役とも親しく話しさせていただき、特にガズラン現地御視察時の話で盛り上がりました。

ガズラン現地を視察し状況を良くご存じで
「大森君、2001 年の視察時には世話になったね。あの環境もコストも苦しい中で良くやってくれている。ありがとう。引き続き最終号機の引き渡しまでよろしく頼む」

と言って頂きました。
重工の会長の身ながら我々の現地の事も気にかけて下さっていたことに感激しました。

一方私の出身母体の旧 MCEC（家内も MCEC 出身）からも昔の仲間が駆けつけていただき旧交を温めたのが昨日の事の様に思い出されます。

当時私と MCEC 同期入社の社員が協会に派遣されており、彼を通じて旧 MCEC 社員とも親しく歓談されておられました。ここに増田元相談役のご冥福をお祈りいたします。

以上

目次に戻る

長機会ホームページ　2025 年 11 月号掲載

「偉大なる先輩から学んだこと」　　岩崎啓一郎

増田信行さんがご逝去されて、５か月になろうとしています。私は増田さんと同じ旧一工作部に入社した関係で、さまざまな場面で増田さんにご指導頂きました。その中のいくつかをこの場を借りて紹介したいと思い纏めました。

１．一工作部時代

私は昭和 53 年（1978 年）に三菱重工に入社し、7 月から長崎造船所第一工作部組立課に配属になりました。当時の直属の課長は花田公行さんで、増田さんは隣の第一機械課長、部長が永石さんでした。

数年後部長は久米さんに代わり、増田さんは次長になられていたと思います。時期は定かではありませんが、ある時、部長室で何かを報告した折、久米部長から「岩﨑君、君には No 禁止令を申し渡す。」と言われてしまいました。増田さんは傍におられて、「No から始めると物事を建設的に考えられなくなるからだ。」と説明して頂きました。

増田相談役と一緒に 中国貴州省貴陽にて

当時、私はスペインやアメリカの発電所建設工事等の長期出張で工場には殆どいませんでした。
その後、増田さんは一工作部長になられて 1985 年 10 月 1 日付けで部長室直轄の「技術開発グループ」をつくることを決められ、私はその一員に指名されました。まだ、アメリカのヒーバー地熱発電所の試運転中でしたが、排熱蒸気が地下に戻らない問題で出力が伸びない状況が続いていたのでお客さんの了解を得て帰国。約 1 か月遅れで技術開発グループに合流しました。

そして、私は一機の無人翼環製造ラインをつくる特別建設を担当するように指示されました。しかし、当時の一機は NC で動いている機械もほとんどない状態。そういう中で横中ぐり盤と竪型旋盤を無人搬送ラインで繋ぐという計画。私にはあまりにも現実離れした計画に思えて、担当できないとかたくなに固辞し、ついに増田部長に直談判しました。

増田部長の前で私ができない理由をとうとうと述べると、増田部長は「岩﨑君、この計画は長船所長と原動機事業本部長の連名で取締役会に諮り、承認されたものだ。これをできないというのではなく、如何にしてこの計画に近いものを実現できるかを考えて報告してくれ。わかったか」と一蹴されました。私はこの部長の指摘になぜか納得し、さすが部長だと尊敬の念を抱いたのを忘れません。

そして、その日の定時後だったと思いますが、飲みに連れて行ってもらったところで、久米部長から以前言われた「No 禁止令」の話を増田さんがされて、「今後は必ず Yes から入るようにしろ・・・・・」と言われてしまいました。これが私にとってその後の長い会社人生の中の

大きな教訓となりました。

２．増田さんが社長時代、私は一機課長時代

その後、私は特機部に異動し、増田部長はやがて長船を離れ、広島、下関を経由されてついに社長に就任されました。ちょうどその頃、私は一工作部に戻り一機課長を拝命していました。増田社長が長船を訪問された折に一工作部に寄られ、久しぶりに再会しました。

懐かしくお話をしている時に突然「岩﨑君、君は一機の生産性をどこまで上げたか」と質問されました。「俺は 4 倍にしたぞ。・・・・君も俺と同じくらいの生産性向上をしてくれ、頼むぞ・・・。」と言われたので、「頑張ります。」とだけ返事し何も反論しませんでした。すると増田さんは一機の生産性向上が進んだ結果、チーム作業がなくなり、大きな工作機械を各々一人で操作する職場に変化した。その結果作業者は個人作業の責任の重さと精神的負担の大きさなどの課題に直面しているから難しいと私の悩みを代弁してくださいました。そして、帰り際に私の肩を叩いて「頑張れよ。頼むよ！」と言われて車に乗り込まれました。

３．増田さん相談役、私が本社時代

その後、私は特殊機械部に再度異動し、2004 年から本社の航空宇宙事業本部に転勤しました。そして、2008 年から航空宇宙事業本部業務部長となり、当時スタートした MRJ（三菱航空機株式会社）の管理責任を仰せつかっていた頃、増田相談役に呼ばれました。
第一声は「MRJ は国家プロジェクトだし、三菱重工にとっても大変重要なプロジェクトだ。頑張れよ・・・・・。」と、励まして頂きました。

数年が経ち、副事業本部長に就任した挨拶に行ったら、「本当によくなれたな！」と褒めてくださいました。そして、MRJ の進捗状況の話をしている時に、私が名航の問題点を口にしだした時でした。増田さんは「今の君の言い方は何だ！評論家のように聞こえるぞ！もっと、当事者として、自分の事として話さないと人はついてこないし、解決できないぞ。名航の事はいろいろと聞いているが、いまや君はそれを纏める立場だ。どうすれば、よくなるかを名航の皆と一緒に考えて一つ一つ解決していくのが君の役目だろう。」と厳しく諭されました。

４．増田さん相談役、　私が中国総代表時代

毎年 4 月に　河野洋平会長を団長として、日本国際貿易促進協会（略称：国貿促）が中国を訪問し、北京では李克強首相など要人を表敬訪問していました。増田さんは当時筆頭副会長として河野会長をサポートされていました。北京での会合の後、地方に行きますが、2014 年は貴州省貴陽を訪問しました。

貴陽の観光地で増田さんと雑談をしていると、河野会長がわざわざ近づいてこられ、増田さんが「彼が岩﨑君です。三菱重工の中国総代表です。・・・」と紹介してくださると、河野さんが「岩﨑さん、増田さんは私にとって、また国貿促にとって欠くことのできない方です。あなたからも増田さんにはいつまでも国防促副会長を続けてもらうように言ってくださいね。」とお願いされました。

その前に増田さんから、足が少し不自由になってきたからそろそろ後進に道を譲りたいと聞いていたので、私は答えに窮していましたら、増田さんがうまく取り繕ってくださいました。すると河野会長が「岩﨑さん、今の増田さんの言い方はうまいでしょう？　増田さんは中国人と話をしている時も同じ様にうまく纏めてくれます。本当に絶妙な話術です。

国貿促の副会長は他にも何人もいますが、「増田さんほど頼りになる方はいないですよ。本当に頼みますね。」と言われてその場を去られました。増田さんの場の作り方、話の進め方などについてはこれまでも上手いと思っていましたが、改めて、これも三菱重工の社長にまで上り詰められた要因だろうなと再認識しました。

貴陽の現地で民族衣装の女性と

北京事務所で揮毫後の増田さん

また、北京事務所の中国人スタッフたちも増田さんが大好きで、「北京に来られるなら是非事務所に寄ってもらうように言ってください。」と皆異口同音に私にお願いにくるのです。

そもそも、歴代の社長で北京事務所に来られた方が何人いるでしょうか？その中で中国人スタッフと話をされた方はいらっしゃったでしょうか？

以上のように、増田さんはいつも軸がぶれずに物事を建設的に解決しようとされ、包容力もあり、そして臨機応変な対応ができる方だと思っていました。私が心から尊敬した方でした。

北京のレセプションで

（写真左　MHIA スタッフ、写真右現在の中国総代表原さん）撮影：増田信行氏

以上　目次に戻る

「増田さんと花田さんの思い出」　　藤川 卓爾

今年６月に増田信行さんが亡くなりました。また令和元(2019)年 12 月に花田公行さんが亡くなりました。お二人に共通するのは長船第一工作部長と本社副社長を歴任したこと、お名前の漢字４字中２字（「田」と「行」）が同じということです。
私は入社以来設計部門に勤務していましたが、平成６年４月から平成８年３月まで第一工作部長を拝命しましたので、私にとってお二人は大先輩です。

増田さんとの出会いは、昭和 56(1981)年１月に海外タービンメーカーの工場視察でご一緒したときです。当時の第一工作部の永石部長と増田次長、組立課の花田課長の３名がアメリカのウェスチングハウス社とイタリアのフランコ・トシ社とスペインのバサン社のタービン工場を視察しました。設計から誰か付き添えということで私が同行しました。

1981.1.22　レスター工場　　ウェスチングハウス社　　1981.1.19 ウィンストンセーラム工場
岸本　○　藤川　○　永石 増田 花田　杉谷　　藤川　　永石　増田　花田
敬称略

増田さんは第一工作部の第一機械課で大型プラノマティックを導入しました。それまではタービン車室の平面部はフライス盤、円周部は中ぐり盤、穴はボール盤と別々の機械に乗せ換えて加工していましたが、大型プラノマティックでは１台の機械で平面加工も円周加工も穴加工もできるようになりました。

第二機械課では FMS(フレキシブルマニュファクチャリングシステム)を導入しました。自動工具交換式の多軸 NC 工作機械と搬送ロボットによって、ねじり翼などの複雑な形状の翼を 24 時間無人運転で加工できるようになりました。
平成 7(1995)年６月に社長に就任され、９月の長船来所時に第一工作部にも来られました。

花田さんは組立課でタービンの重要部品であるロータの製造担当でした。ロータ完成後の高速バランス試験で軸振動が大きくなることがあり、私は呼び出されて徹夜でバランス調整をしたことがあります。長船副所長就任後も時々タービンのことについて電話でご下問がありました。

関東では第一工作部首都圏 OB 会があり、私も横浜に移ってから何回か新年会に出席し、増田さんや花田さんをはじめ多くの先輩、後輩とお話ししました。残念ながらコロナ禍以降は開催されていません。

1995. 9. 26 増田社長長船来所 第一工作部にて

左端　増田さん　　右端　藤川

2017. 1. 14 第一工作部首都圏OB会
ホテル横浜キャメロットジャパン 桂川
後列左から 今村、和田、相馬、宮津、山中、土師、藤川
前列左から 花田、岸原、執行、増田、後藤　敬称略

花田さんが平成 30(2018)年の秋に入院された時、病院から電話がありました。タービン車室の保温の厚さと停止時の車室温度降下の関係について EXCEL でシミュレーション計算をした結果を持ってお見舞いに行きました。それから 1 年余りして亡くなりました。

増田さんは一昨年の長機会総会に出席され、お帰りの時にタクシー乗り場までご一緒したのが最後でした。改めてお二人のご冥福をお祈りいたします。

以上

目次に戻る

長機会ホームページ　2026 年 1 月号掲載

「増田さんの背中」　　松浦一郎（昭和 56 年入社）

【初めまして新入社員です】

私が、S56（1981）年に入社し、7 月に第一工作部組立課第一組立係に配属された時、増田さんは第一工作部部長室の次長を務められていました。

配属後間もなく、出身大学同学部同学科の同窓会で新入社員歓迎会が開催されました。私が配属された組立課には、複数の先輩同窓生がおられましたが、当日、新入社員以外の課スタッフ職以上、課長までが、全員泊まりかけ研修で不参加だったので、次長の増田さんが 2 次会以降の面倒をみて下さいました。将来、社長になられる方とは、当時、思いもよらず、殆ど緊張もせず、気楽にお世話になりました。有難うございました。

増田さんが、一工部の中で所属された課は第一機械課だけだったというのは当時もその後も珍しい存在でした。工作部では、課が異なると別の世界に近く、それもあって組立課新入社員の私が、一機課出身の増田次長に仕事面で直接お会いしたり、お話を伺ったりする機会は殆どありませんでした。加えて、1 年目の見習いが明けた後、程なく長期の海外出張を度々仰せつかることとなったので、接点は非常に限られていました。

増田信行様ご夫婦で150周年式典参加 増田信行様（前列向かって右から二番目）
奥様（前列向かって左端）　（2007年10月11日　第一工作部にて撮影）

創業150周年式典会場グラバー園にて　増田信行様ご夫婦
（2007年10月10日撮影）

【各課の猛者と共に】

少し転機が来たのは、S61（1986）年。当時、第一工作部長になられていた増田さんの肝煎りで、技術開発 Gr という職制が、生産技術課の中につくられました。そこに、各課から精鋭/猛者/論客(癖ツヨ)のスタッフが集められ、部長室と同じフロアにその新 Gr の席が置かれました。私は、癖ツヨ度が低かったのか？設立時のメンバーではありませんでしたが、半年位後から加勢者として転勤前の事前準備も兼ねて所属することになりました。
各課からの精鋭+α のスタッフは、部にとって重要な設備投資案件やソフト開発等の業務に当たっていました。増田さんは、部長室からトイレに行く途中にある技開 Gr の関係者のス

ペースにしばしば立ち寄られ、様子を見たり進捗状況聴いたりされていました。頻尿ではないかという声もグループメンバーで囁かれる程、立ち寄りは頻繁でした。
そんな関係で、それまでよりもぐっと近くで、お話を伺うことや先輩スタッフ達とのやり取りを聴くことが多くなりました。各課からの精鋭スタッフは、担当している案件の個別の内容に関しては、部長には負けない、という自信があった様で、遠慮会釈なく、時には激しい口調で説明、議論することもありました。正直、私には知識が不十分で理解できないことも多く、一方で担当者の強い口調に、驚かされることも少なくありませんでした。
それでも、増田さんは、どんな担当者の言葉、意見に対しても常に冷静にじっくりと話を聞かれた上で、理路整然と自分の考えを示されていたのが、印象的でした。その内、私も他の事業所に出張に出向くことになり、部長に挨拶に出向いた時、増田さんから『出張旅費の 2 倍の効果がある改善案を見つけて帰ってこい』と言われたので『2 倍で良いのですか？』と返し側に居られた次長の顰蹙をかった覚えがあります。増田さんには、部長室の席に居られても何でも気楽に言わせて貰える懐の深い雰囲気がありました。

【末永く後輩とも共有し大事にしたい教え】

その後、多分、本社の管理部門に異動になる前後に増田さんから頂いたと思う言葉で、今も忘れずに覚えているのは、
『汝、俯瞰しおるや』
‐常に全体像を大所高所から把握して見ることを忘れず、その中で見つかった問題点には直ぐに降りて行って対応し、目途が付いたら再び舞い上がって全体を見るのが大事-
上位の立場になった時、問題が発生した時、誰しもそれまでの自分の知見や経験に関する分野、興味がある分野、問題が起こっているところ、自分の周りや声の大きな人に目が行き勝ちになることを含めて戒められた言葉だとその後の経験も経て解釈していますが、応用の広

2016年1月　第一工作部関東地区OB会にて　前列中央増田信行様　左花田公行様　後列右から4番目　筆者松浦一郎

い言葉、増田さんらしい言葉と思い、しっかり実践が出来ているかどうか、反省の要素はありますが、大事に心に留めております。

その後、増田さんも第一工作部を離れられたので、お会いする機会は少なくなりましたが、偶々増田さんが長崎に来られて関係者と集う機会があった時に感じたのは、長く籍を置かれた第一機械課の多くの現場出身者から増田さんが深く慕われていることでした。
現場出身の職人気質の人は、肩書や立場に忖度は全くなく“人となり”を見て近づくか否かを決める人が多いと痛感していますが、増田さんには、そんな現場出身の多くの人を引き付けるものが溢れていることをこの時の OB の皆さんの様子が、如実に表していました。

「ローマ人の物語」の時代から人は、自分の見たい事、聴きたい事だけを見聞きする、周りも忖度して、上司の意に沿った情報だけを上げる、という傾向があり、近年の職場、会社や大国でもそれは増長傾向かと思われますが、増田さんは、現場や実務担当者が話しやすい雰囲気を自然に作り出して、自分の考えに反対する意見でも生の声をしっかりと引き出し、その上で判断を下すという部下に取っても非常に有難いリーダの見本を示して下さっていたと感じています。今、古希を迎える自らを振り返ると良き先輩を見ながら寧ろ前述の面も少なからずあった様だと反省する面はありますが、それは棚に上げてでも、製造部、長船の後輩には、組織のリーダとなる者のバックボーンとして、末永く受け継いで欲しいと伝えていきたい増田さんの背中です。

『己小さく、人は大きく』 という増田さん以前の先人の言葉も頂きましたが形而上、形而下の両面からその言葉を示して下さった増田さんの背中を思い出しながら、ご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

以上

目次に戻る

増田信行様　追悼文集

令和８年２月１日発行

発起人　冨永　明
編集者　牧浦秀治
発行元　長機会
連絡先　（牧浦）
095-5944-7443
boyd.makky.hide@gmail.com